【研究報告書】

次世代につなぐ 青少年団体の挑戦

―コロナ禍での青少年活動の実践―

2023年3月
兵庫県青少年団体連絡協議会

2022年度
（公財）兵庫県青少年本部委託事業

兵庫県青少年団体
連絡協議会
調査報告書
2023年3月

次世代につなぐ 青少年団体の挑戦

～コロナ禍での青少年活動の実践～

Contents

はじめに …… 3

【企画記事】

ダイアローグ　この人に尋く① …… 4

中元 康雄・精神保健福祉士

インタビュー・コメント …… 9

太田 はるよ・兵庫県青少年団体連絡協議会 運営委員

ダイアローグ　この人に尋く② …… 10

辻 由起子・内閣官房こども政策参与

インタビュー・コメント …… 15

鈴木　武・兵庫県青少年団体連絡協議会 理事

実践事例紹介 …… 16 ～ 17

速水 順一郎・兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問

萩本 義郎・兵庫県青少年団体連絡協議会 監事

提言　青少年活動団体のこれから …… 18

ひょうご青少年憲章 …… 19

はじめに

山崎 清治
兵庫県青少年団体連絡協議会 副代表理事
NPO法人生涯学習サポート兵庫理事長

コロナ禍の３年間 青少年の成長にどう影響

兵庫県青少年団体連絡協議会は、昭和42（1967）年に発足しました。当時、大学進学率がまだ２割にも満たず、勤労青少年を取り巻く社会問題が顕著化していました。そんな中、各青少年活動団体がその課題に積極的に取り組み、さらにそれぞれの団体同士が連携を行なったことが私たち協議会の始まりです。そして今日まで、兵庫の青少年が心も身体も健康に育つことを目的に様々な活動を続けてきました。

2019年、新型コロナウィルス感染症が流行すると、青少年をとりまく環境は激変しました。突然の一斉休校、自宅待機、活動やイベントの自粛、マスク生活、黙食と、青少年の成長に欠かせない様々な体験や、人とつながる手段がことごとく奪い去られていきました。オンラインなどの工夫により、一見、順応し問題なく過ごしているように見えますが、青少年や青少年をとりまく環境、そして将来にどのような影響を与えているのかが、深くまで検証できていない部分があるのではないかと思います。

青少年がこの３年で奪われたものは何なのでしょうか。大人にとっての３年と、青少年にとっての３年は意味合いが全く違います。私たちは青少年が活動する場所を守る者として、失った体験や機会をきちんと検証し、取り戻す必要があるのではないかと思います。

今回の調査研究事業では、２人の専門家から青少年に起こった変化や影響をそれぞれの分野からお話していただきました。ここにも私たちが今後活動すべき方向性や使命が隠されているように思います。

青少年活動とは青少年のための活動です。今を生きる青少年に必要なものは何なのかしっかりと見据えながら、各団体が事業を展開していきたいと考えています。

この人に尋く

Dialogue No.1

精神保健福祉士　中元（なかもと） 康雄（やすお）さん

コロナ禍の子どもに居場所を

遊び、楽しむ居場所
大人が子どもに与えて

聞き手
萩本 義郎
兵庫県青少年団体連絡協議会 監事
（いえしま自然体験協会副会長）
太田 はるよ
兵庫県青少年団体連絡協議会 運営委員
（兵庫県子ども会連合会筆頭副理事長）

（本文敬称略）

【萩本】
　新型コロナウイルス感染症の発生から３年が経過しました。さまざまな制約が課せられたコロナ禍は、子どもたちにどのような影響を与えているのでしょうか。

【中元】
　クリニックでは、子どもがネットゲームによって昼夜逆転し、不登校に陥るなど、問題が比較的悪化している家庭が相談に来るケースが多いですが、コロナ禍の影響で、ゲーム障害に該当するか否かの判断が難しかったグレーゾーン（中間領域）の子どもがレッドゾーン（警戒領域）に入ってしまったという例が多くなったと感じています。

ゲーム障害など依存症に見る２タイプ

【萩本】
　依存症について、詳しく教えてください。

【中元】
　世間でよくネット依存という言葉が使われていますが、医学的な定義はまだ定まっていません。依存症とは、脳の報酬系と呼ばれる部分の器質的な異常によってコントロールを失う病気です。快感をもたらす薬物による依存が有名ですが、快感をもたらす行動も依存を引き起こし、その代表がギャンブル依存症です。最近になってそれにゲーム障害が加わりました。これが果たしてＳＮＳやＹｏｕＴｕｂｅやＴｉｋＴｏｋなどへののめり込みが当てはまるかどうかは研究途上で、診断名としてネット依存は保留とされています。

　依存症になる過程には２つの流れがあります。アルコール依存症で言うと、もともとお酒が好きで飲み過ぎてしまい依存症に陥って鬱状態になる場合と、鬱病や睡眠障害を抱えていて、それを紛らわせるために酒を飲んで依存状態になるケース。前者は酒を断つことで回復をもたらしますが、後者は断酒しても鬱病や睡眠障害は残ったままです。酒を止める一方で鬱病治療が必要になるのです。この判別は専門の医師でも難しいことです。

　ネットゲームに置き換えると、ゲームが好きでのめりこみ、生活のサイクルが乱れて安定した通学ができなくなる例と、学校生活や友人関係がうまくいかず（馴染めず）不登校となり、ネットゲームに没頭しているケースとなります。後者だと、ネットやゲームの付き合い方を変えるだけでは問題は解消しません。ネット依存やゲーム障害には、学業や友人・家族関係など様々な問題が複雑にからんでいるのが実情です。子どもたちが抱えている生きづらさが行動に表れた結果と言えます。

見えない不安…ネットに逃げる子ども

【萩本】
　後者の場合、どのようなケアが必要になるのでしょうか。

【中元】
　学校生活における友だち付き合い、勉強、またはコロナ禍の先の見えない不安などのストレスに対処するために、ネットの世界に逃げている子どもが多いのではないでしょうか。ネットゲームにはまって止められないという子どもはごく一握りです。ひきこもっている子どもの場合、家ですることがないのでゲームをしているというケースが大半で、逆に日常生活や人付き合いが円滑にいけばネットゲームに時間を費やす必要もありませ

人生に役立てるネット教育へ

ん。ゲームは現実的な問題に対する憂さ晴らしであり、子どもたちの心休まる居場所が見つけづらい世の中になっています。

【萩本】

そうした子どもに大人はどう対応していくべきでしょうか。

【中元】

子どもがストレスを解消できる場、しんどい、つらい時の逃げ場所をつくっていかないといけません。ゲーム障害などでクリニックに相談に来る子どもについて思うのが、みんなすごく真面目だということ。両親からの期待に応えないといけないとか、塾に行かせてもらっているのでしっかり勉強しないといけないなど、こうしてはいけない、こうでなければならないと考えてしまう子どもが圧倒的に多いのです。もう少し自分の緩め方を見つけたらいいのにと思うことが多々あります。ゲームをしても両親の期待を裏切っていると感じてその世界に入り切れず、イライラしています。ゲームの世界が本当に居場所として役立っていれば、心穏やかに過ごせるはずなのに。

親の気持ちを子どもに言葉で伝えよう

【萩本】

家族としては、どういう対応やアドバイスが必要なのでしょうか。

【中元】

今やっていること以外に別の楽しい選択肢があるということを子どもにきちんと伝えているか、考えてみてほしいです。しんどい思いをしてまで、イライラしてムキになってまでやる必要ないよと、親としての気持ちを一度言ってみましょう。それを口に出せば、子どもは緩めていい部分を理解するはず。ただし、「お前がしたいようにしろ」と言うだけでは中身がありません。あなたを見てこんな心配をしている、こんなことを危惧していると具体的に伝えた方が、子どもは判断がしやすく動きやすいはず。そうすれば、振り上げた拳を下ろすタイミングが少しずつ見えてきます。

情報技術どう活用？子ども間で二極化

【中元】

また、子どもたちのスマホ利用で言えば、コロナ禍で普段からマスクを着用し、表情が読みにくいうえに、集団で集まることも忌避されるため、ＳＮＳ内の輪から外れないように、子どもなりに気を遣っています。そうした背景を無視して、大人の論理でネットは悪者だとスマホ利用に制限をかけると子どもがかわいそうです。

ネット利用は、長時間使うことが悪いのではなく、使い方を問題視すべきです。主体性のある子どもは与えられた条件下で楽しみを見つけてポジティブに活用できますが、そうでない子は人付き合いがわずらわしいからと手っ取り早くネットやゲームにすがり、時間を無駄に潰してしまうなど、子どもの間で二極化が進んでいます。ネット世界の膨大な情報やそこでの新たなコミュニティをどう人生に役立てていくか、大人も子どもも情報リテラシーを考えていくことが不可欠です。まだ経験したことのない未知の分野だけに、教育が重要な役割を担ってくるのでしょう。

コロナ禍が子どもたちに与える影響について話す中元さん（左）

大人が関わってリアルの楽しみ教えて

【萩本】

昨今の情報社会で、青少年団体にどんな活動を求めていますか。

【中元】

ネットゲーム以外で、身近な遊びや楽しみ方をアシストする取り組みをたくさん実施してほしいですね。竹トンボづくり、魚釣りなど、ネットを使わなくてもリアル（現実）に多くの楽しみがあり、そこで友だちと一緒に喜び合えると教えてほしいです。コロナ禍で制限がかかり、子どもたちは外でどんな遊びをしたらよいのか分からないので、大人たちが積極的に関わっていろんな遊び、楽しみ方を教え、伝えていかなければなりません。

また、ひきこもりの子どもは、最後の逃げ場所として家に留まっており、ゲームというガス抜きで心身のバランスをとっています。それを理解せず、むやみに制限をかけてしまうと追い詰められ、暴力や暴言などでしか返せなくなってしまうので注意が必要です。

体験活動通じて親子一緒の時間を大事に

【萩本】

親の視点で、コロナ禍の子どもにどう接すればよいでしょうか。

【中元】

ほんの５分や 10 分で良いので、ご飯を食べたり、テレビを見たり、掃除をしたりして一緒に過ごすなど、協同での作業、共通の体験をする時間をできるだけ大事にしてください。

また、あるＮＰＯが親子で農作業を体験してもらうイベントを実施しており、参加した子どもは食卓に上る枝豆が栽培にどれだけ手間ひまをかけているかなどを知り、食材の見方や食生活にも影響を与えています。きっかけを作れば子どもなりに新たな視点や関心を見つけるし、自然の中で親と一緒に体験したという良い思い出づくりにもなります。青少年団体にとって、こうした仕掛けづくりはとても重要ではないでしょうか。

【太田】

親子でけん玉を体験するイベントを香美町で実施しましたが、とても盛り上がりました。けん玉

一つで親子の交流が生まれる、そんな体験を子ども時代にたくさんしていくことが重要ではないでしょうか。

【中元】

幼少期にお父さん、お母さんとたくさん遊んだ経験のある子どもは感受性が高いことから、ひきこもりに陥っても、ちょっとしたきっかけをアシストすると大きな変化がおこります。逆にそうした体験が乏しい子どもは一から教える必要があり、より対応が難しくなるのです。子ども時代に感受性を高める経験があったか否かの差は大きいです。

居場所見つけられない子どもに支援必要

【太田】

ネット依存で中学に行けなかった生徒が、高校に進学すると活動グループに入り、それが居場所となって依存から脱したという出来事を目の当たりにしたことがあります。子どもが居場所を見つけることは重要ですが、それが見つけられない子どもにも目を向け、居場所を提供していくのが青少年団体の役割ではないでしょうか。

【中元】

居場所を設けても、支援が必要な子どもが集まってくれないという難しい側面もあります。兵庫県のオフラインキャンプでは、ネット依存傾向の若者に自然体験を提供し、世代の近い大学生らがメンター（助言者）として寄り添い役を担っています。子どもたちは憧れや目標を重ねて刺激を受けており、うまくいっているモデルの一つです。

自分のペースで時間過ごせる仕組みに

中元 康雄 さん

精神保健福祉士、臨床心理士、公認心理士、産業カウンセラー。三宮センタープラザ（神戸市中央区）の心療内科・精神科「幸地クリニック」

【萩本】

子どもたちに提供する体験活動で、どのようなものが適切だと思いますか。

【中元】

絆やつながりという部分が強調され過ぎると、かえって息苦しさやしんどさを感じる子どもは結構多いです。協力や協調を強要することなく、少し緩いつながりで、それぞれが自分のペースで時間を過ごせる仕組みがあれば、参加する子どものハードルが下がって対象が広がるのではないでしょうか。

要領よくこなすスキルがある外向性の高い子どもが世間で評価されがちですが、マイペースだがしっかりと考えながら少しずつ前に進んでいく内向型の子どももいます。その両方にスポットを当ててほしいです。

【萩本】

最後に、青少年団体にどういう役割を期待されていますか。

【中元】

学校のような先生と生徒という関係ではない、様々な年代の人たちとのフラットな関係こそ大事です。青少年団体は子どもと一緒になって楽しもうというスタンスで、多世代がともに取り組める体験型イベントを提供してほしいです。

インタビュー・コメント

ネットやスマホより もっと楽しい体験を

太田 はるよ

初めて幸地クリニックを訪れた時の中元さんの第一印象は、「朗らか」で「安心できる」人物なのかも…というものでした。お話を聴き進めると、それは確信に変わり、すっかりお話に惹きこまれました。ご自分のことも交えながらのコロナ禍でさらに加速した症例等の話をお聴きしていると、「私たち大人や青少年活動団体にできることは、一体なんだろう？」と、今更ながらですが、改めて考える時間となりました。

その中でも中元さんからのお話で、次の２点が心に残りました。

・子どもたちはストレスと見えない不安でいっぱい！

・大人もリアルに言葉で気持ちを伝えよう！

どうしてもネットやスマホが悪者にされがちですが、最近話題に上がっている「闇バイト」や「不適切投稿」も同じで、いずれも心の問題であり、「バカッター」が流行った10 年ほど前から何も変わっていません。子どもたちがネットやスマホよりもっと楽しいことを知らない（未体験）だけ… 大人の事情はどこかに置いといて、大人も子どもたちと一緒にゆっくりと楽しい時間を過ごすことが、解決への一歩なのではないかと考えます。

コロナ禍のこの２～３年、日本の多くの分野でデジタル化が大きく進み、学校教育では子どもたち一人に１台のタブレットが与えられ、リモート学習などの学習機会は便利なツールのおかげで進歩しました。その反面、様々な行動に制限がかかり、子どもたちの「心」「身」がグッと成長する時期に成長過程で必要不可欠な体験活動が激減しました。リアルな関係や体験で培われる「自分で考え、決める」という自己決定や「自分の考えを言葉にして伝える」等が阻まれているような気がしてなりません。

今年発足される子ども家庭庁では、子どもたちが幸せになるために、異次元の少子化対策として、子育て予算が倍増されるようです。しかし社会が変わっても子どもたちは、今も昔も変わりません。では「サードプレイス」としての役割を担う青少年団体にできることは？　と考えると…。アフターコロナの時代にあった生活スタイルの中で「～でなければならない」という枠組みを外し、「子どもたちにとって本当に大切なことを考えること」や「あきらめずに挑戦する心」をコアに持ち、青少年団体の本来の姿や意義を真剣に考えながら、子どもたちと共に更に進化し続けることに尽きるのではないでしょうか。

～思い出すたびに「心の糧」となるような記憶（涙が出るくらいの感動）を子どもたちに贈りたい…～

この人に尋く

Dialogue No.2

内閣官房こども政策参与　辻 由起子（つじ ゆきこ）さん

“仲良しの他人”を増やそう

【山崎】
　多岐にわたる活動を行っておられますが、現在の主な取り組みを教えてください。
【辻】
　きっかけは 2010 年に大阪市西区で起きた母親の育児放棄で２児が餓死した事件を受けて、ＳＮＳを通して母親らが子育ての悩みを語る場をつくったことです。今年で 13 年目で、ここを起点に茨木市と協働でたくさんの子育て応援イベントを行ってきました。
　若年出産などでサポートが必要な母親の支援、大学生による補助学習を兼ねた子どもの居場所づくり、親子防災活動やそれを織り交ぜた農業体験と、そこで収穫した作物の販売体験などがそうです。特徴的なのは、匿名・ドタキャン OK で出入り自由とし、関心のある人がふらっと立ち寄り、遠くから眺めてもらうだけでも歓迎という仕組みにしていること。イベントはいろんなテーマを盛り込み、多くの人が関わりやすい形にしています。
【山崎】
　匿名性を持たせているのはどういう意味があるのでしょうか。
【辻】
　個人情報を入手するのは信頼関係を重ねてからという原則を大切にしています。役所では住所や名前、課税証明などを把握してから支援を始めますが、これではＤＶなど課題を抱えている人は（危険が及ぶことを警戒して）相談を躊躇してしまいます。「ゆるくつながる」が活動テーマで、ルールの前に思いやりを心がけ、人と人のつながりを大事にしています。

聞き手
山崎 清治
兵庫県青少年団体連絡協議会 副代表理事
（NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長）
鈴木　武
兵庫県青少年団体連絡協議会 理事
（日本ボーイスカウト兵庫連盟相談役）
速水 順一郎
兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問

（本文敬称略）

生活困窮の若い女性支援でシェアハウス

【山崎】
　（取材場所の）ここは公営住宅ですが、シェアハウスにしていると聞きました。
【辻】
　コロナ禍で生活が苦しい若い女性を支援するため、行政と連携して空き部屋が多い３ＬＤＫの府営住宅をシェアハウスにして住まいを提供しています。親自体が経済的に厳しい状況にある一方、若者の自助努力だけで成り立つようなシステムになっていないのが社会の現状です。経済的理由やＤＶ・虐待などの事情で親に頼れない若者は連帯保証人や敷金を用意するのが難しく、行き場を失っています。公営住宅の目的外使用で 2021 年秋にスタートさせました。2023 年 2 月には学生向けのシェアハウスとコミュニティルームもオープンしました。市と協働することで信頼が確保され、地域住民の助けもあって、孤立しがちな境遇の女性たちに人とのつながりや安心を感じてもらえる場になっています。

世の中の理不尽を取り除くことが責務

【鈴木】
　これだけ多くの、中身の濃い活動を展開できるモチベーションとは何でしょうか。
【辻】
　祖父が民生委員、父は学校長を務める家に生まれました。私は大阪府下でトップクラスの高校に進学しましたが、18 歳で結婚、19 歳で出産した

現場の困難解消が「制度」の役目

ことで親から勘当されました。家族や地域から切り離されて人生が一変し、家族や地域に育ててもらった尊厳は奪われ、謂れのない差別も受けました。元夫は働かず暴力をふるう人で、私は一人で子育てを余儀なくされ、その最中に娘を虐待してしまったのです。

なぜそこまで追い詰められたのか、それを考えようと通信制の大学に通って学びました。見えてきたのは制度の狭間で支援が届かずに苦しむ人たち、差別によって理不尽な扱いを受けている人がいること、それにより人生が捻じ曲げられている人がいるという実情です。こうした人たちへの強い共感が、活動のベースにあります。

【山崎】

自分たちの世代の理不尽は自分たちが正しておかないといけないという訳ですね。

根性論が引き起こす子育て負のスパイラル

【辻】

例えば、昭和 47 年前後に生まれた団塊ジュニア世代は、「努力しろ」「頑張れ」といういわゆる根性論の教育を受けてきた人が大半です。個性ではなく成績が評価される偏差値教育で、親や先生にアドバイスを求めても「努力が足りない」「もっと頑張れ」と自助努力を求められ続けました。

そうした世代が親になると、同じように子どもに努力を求めるようになりますが、うまくいかずイライラして怒ったり、悩んだり、子どもに責任を押し付けたりしてしまいます。努力を求めるだけでは子育てはうまくいきませんが、どう対応するかの教育を受けていないのでそこから抜け出せず、負のスパイラルに陥ってしまうのです。

「貧困」は年度では区切られていない

【辻】

国の制度にも理不尽が付きまとっています。例えば、福祉は世帯主に支援が差し伸べられますが、親が子どもを守ろうとしなければ、子どもは支援の恩恵を受けることができません。そこで支援団体が手を差し延べようと役所に相談しても、制度にあてはまらないと二の足を踏むのです。これでは子どもを助ける制度になっていません。

また、国は制度を施行する上でルールを敷き、ＮＰＯなどに委託をする時は年度単位の事業計画を求めますが、貧困は年度で区切られているわけではありません。今日の食事を求めている人の支援にどんな事業計画が立てられるというのでしょうか。こうした理不尽の壁を取り除き、次世代に引き渡すことが私の責務だと感じています。経験上、見て見ぬふりはできないのです。

【速水】

社会の仕組みを変えるため、国のルールや考え方をどう打ち破っていくかが重要となります。

【辻】

政府には年度単位で考えているから政策的に失敗していること、その慣例を捨てて時間軸を見直すことを助言しています。制度があることと制度が使えることは別物。使えない制度は絵に描いた餅で、住人の困りごとを解消するのが行政の役割です。書類改革が国民を救うと言い続けています。

コロナ禍が与えるシングルマザーへの影響を解説する辻さん（左から２人目）

ひとり親家庭の生活安定へ経済支援を

【山崎】

コロナ禍の影響で、子どもや家庭にどんな変化が起きたと考えていますか。

【辻】

自分の力だけで何とか踏ん張ってきた人が、真っ先にダメージを受けたと感じています。誰ともつながれず、サポートも受けずにぎりぎりで頑張ってきた家庭が、一気に崩れてしまったのです。

また、コロナ禍の孤独で子育てをする母親の精神状態が不安定になっており、母親失格と感じたり、感情のコントロールが難しくなっているようです。

【鈴木】

こうした現状で、家庭の問題はどうすれば改善していくのでしょうか。

【辻】

まず、相談対応だけでは何も解決しません。家庭を支える経済事情が崩れたことで不和が生じているケースが多いのです。特に、ひとり親家庭が苦しく、生きるための資金が入らずに切羽詰まっており、きちんと経済的土台を立て直す具体的支援が不可欠です。

手っ取り早いのは、非課税世帯となる基準の見直しで、今はあまりにも低すぎます。生かさず殺さずというラインではないでしょうか。これでは真面目に働いても貧困から抜け出せません。

『何となくの顔見知り』増やす地域づくりを

【速水】

子育て支援や課題を抱える若者の応援など、地域社会の質を高めて地域力を向上させていくにはどうすべきと考えますか。

【辻】

「仲良しの他人を増やそう」をキャッチフレーズにしています。立場や組織ではなく、個人同士でゆるやかにつながることが大事です。例えばご近所さんに、「下の子を病院に連れて行きたいから、上の子をみててほしい」など気軽にお願いができる関係づくりが大切ではないでしょうか。それができる場所をたくさんつくって『何となく顔見知り』『なかよしの他人』を増やし、人づくりを視点に地域社会を築いていくのが今の時代のあり方だと思います。

青少年団体で育児・家事支援など展開を

【山崎】
コロナ禍で、青少年団体に求める取り組みは何ですか。
【辻】
乳幼児を抱えた家庭の育児支援や、子どもを預かって宿題を教える学習サポートなど、地域のちょっとした困りごとを請け負うメニューがあればうれしいです。大学生が宿題を教える寺小屋みたいな場所があれば、親は安心して子どもを預けられ、子どもは人と接する居場所ができます。また、子どもたちにチャレンジを促し、結果ではなく、その勇気やプロセスを称える活動を展開してほしいです。
【山崎】
今後の活動について、思うことは何ですか。
【辻】
大切なのは「目の前の人の笑顔と幸せ」と考えています。困ったら相談し、適切な人に頼ることができるという、“受援力”を高めてもらう居場所をもっとつくっていきたいです。

子どもの「遊ぶ権利」に注目、充実求める

【山崎】
青少年団体として体験活動を重視していますが、参加する子は経済的に余裕のある家庭が多く、子どもに体験の格差が生じています。
【辻】
ボーイスカウトの活動に、先輩が後輩に“やってみせて教える”という文化がありますが、お兄さんやお姉さんの背中を見て学ぶという体験はとても大切なことではないでしょうか。
子どもの「遊ぶ権利」を充実させることも重要です。生活困窮者を支援している人の話によれば、路上で生活するホームレスの人たちを見ていると、子ども時代に親と遊んだ経験や自然体験が少なかったのではないかと感じることが多々あるそうです。見立て遊びで想像力を育み、他者と遊びを共有してコミュニケーション能力を養い、競争して負けると次は勝つぞと気持ちを奮い立たせるなど、子どもの遊びには発達段階に応じて重要な役割があります。これが欠けると、見立てができずに仕事が続かず、挑戦心も失われてしまいます。
また、子どもが何かに関心を示せば、その興味を沸き立たせるよう背中を押してあげる言葉をかけることも、感受性を高める上で重要です。
【速水】
青少年活動でキャンプをした際、子どもに月明かりの綺麗な夜空を教えてあげると、翌年もその情景を期待して参加してくれます。こうした経験は大人になっても決して忘れない貴重な体験となります。
【辻】
まさにそれです。特別な何かではなく、子どもの興味を大人がいかに刺激するかで未来が変わってくるのです。

辻 由起子さん
社会福祉士、保育士、防災士、内閣官房こども政策参与。代表を務める「シェアリンク茨木」ではコロナ禍で生活が苦しい家庭・若者支援もするなど数多くの活動を展開している

インタビュー・コメント

インタビューは驚きの連続

鈴木　武

思い出される詩の一節

さまざまな支援品の入った段ボールが複数並べられているシェアハウスの一室でお話を伺った。その一部は本文に紹介されている通りである。よどみなく話される表情は、やはり実体験から試行錯誤を繰り返し、考えを深めて確信し得た自信にみなぎるものであった。
家庭内暴力や虐待など、さまざまな問題に直面する人々のために、自ら現場に走り、真正面から向き合い支援の手を差し伸べる。こうした問題はコロナ後とくに経済的に脆弱な家庭を直撃しているという。問題発生を伝える一本の電話に反応して現場に駆け付ける。これらが辻さんのここ十数年の実体験の蓄積となっている。
私はお話を通じて宮沢賢治の東奔西走する有名な詩「雨ニモ負ケズ」の一節を思い出す。これは決して誇張ではない。詩は賢治が「そうありたい」という想いを綴った世界であるが、辻さんは現実にその世界に生きていると思った。

支援の輪の根底にあるもの

19歳でシングルマザーとなり体験した差別など、世の理不尽を他の人たちに体験をさせてはならない、という強い信念とプライドが根底にあるのだろう。大学にも進み勉強もした。社会福祉士、保育士、防災士などの資格も取得した。一つの信念がこれほど人を変えるものかと思った。
“次世代が楽に生きられる社会を目指したい”というビジョンは、子どもたちの笑顔や幸せと切り離せない。辻さんの周囲には共感した学生や地域の人々が自然と集まり支援の輪が広がる。今では議員が活動を見学に来たり、内閣官房こども政策参与として意見を求められたり、との立場にある。活動を続ける一方で、求めに応じて講演依頼も積極的に受けている。豊富な実体験に基づく講演内容は説得力に富み、聴衆は共鳴し触発され再度聞きたいというリピーターも多いと聞く。私もその一人である。

青少年団体に多くの示唆をいただく

次代の青少年団体への期待を最後にお聞きした。①子どもたちの居場所づくり、②失敗を意識させないチャレンジ活動、③先輩が後輩にやってみせて指導する文化、などの答えが返ってきた。
青少年団体は会員という枠組みの中で動くことが多いが、ときにはその壁を取り除き誰もが自由に参加できるプログラムの必要性を強く感じた。従来の概念や施策とは異なる、いわゆる“異次元”の青少年活動の研究を宿題として与えられた。

実践事例紹介

街は僕らの冒険教室

速水 順一郎

子どもが地域を調べる事業を実施しました。地域の30年前から現在までです。子どもとスタッフが集まり、どう展開するのか相談しました。

まずは、子どもが家に帰り、近所に昔の人が住んでいるのか家の人から聞いてきました。

スタッフも地域の人材を調べました。

子どもたちからは、あすこのおばあさんが知っているのではないか。あそこのおじいさんは地域の世話役をしていたので詳しいのではないかと情報を集めてきました。

スタッフは、郷土史家や地場産業の経営者、教員経験者、地域団体の役員などのリストを作成しました。

まず、子どもたちが地域のおばあさんやおじいさんに話を聞きに行きました。

多くのおばあさん、おじいさんが子どもたちの調査に協力的で、昔の写真を引っ張り出して、むかしの写真を見ながらいろいろな話を聞かせてくれました。

中には、30年前どころか自分たちの子どもの頃の暮らしや遊び、学校の様子を話してくれる方もいました。

また、スタッフのリストから郷土史家に話を聞きに行きました。その人が編集した資料のコピーをもとに地域の移り変わりの様子が子どもたちにわかりやすいように話され、質問にも答えてくれました。

子どもたちは、調査を持ち寄り、30年前の地域の様子を地図に書き落とし、聞いた話をまとめていきました。

子どもたちは、地域の大人の人と普段は話す機会がほとんどなく、最初は、誰が声をかけるのか不安な表情でしたが、大人の人の子どもに向ける表情の柔らかさや思い出しながらの話に、子どもの心も和らぎ、中にはおやつを出してくれ、食べながら話してくれる人もいました。

子どもたちは、地域の人の親切な心に触れ、調査のまとめよりもその話で盛り上がりました。

辻さんの地域をうまく巻き込んだ活動の話をお聞きし、この事例をまとめました。

少し前の話ですが、子どもも、地域の人もそんなに変わってないように思います。

実践事例紹介

自然体験を通して気づく

兵庫県立いえしま自然体験センターでの体験活動
令和４年 10 月８日㈯～ 10 日(月･祝)

萩本 義郎

豊かな自然の中で､仲間とともに語り合い、協力し合い、体験を通して人と人が触れ合うことによって、それぞれの課題に向き合い解決することを目指して実施しました。

当初より、ネット依存傾向の児童生徒を対象に募集しました。その結果、ゲームの時間が長い、人との会話が上手くできないなど、各自が課題を焦点化したキャンプを実施することができました。

指導としては、ネットなどについてほとんど語らないで、触れ合うことや自然の素晴らしさを体験させることに重点を置きました。各自の目標を見ると、ゲームの時間を少なくするとか、挨拶を自分からするなど一人一人が生活を振り返り、自らの目標を立てることができていました。

グループファイヤー

自炊体験

最終日の振り返り

「初めて会った仲間たちと輪を作って話をする雰囲気」「徐々に大きくなる歌声で繋がる絆」「自分たちで作ったカレーを食べる喜び」「協力して漕ぎ切ったカヌー」「様々な風景に美しさを感じた。波の音、風の音、生き物の声、雨の音」「ローソクの薄明かりに映るみんなの真剣な顔つき」「キャンドルファイヤーで盛り上がった一体感」「自分を見つめ直したふりかえり」「目標に向かって飛び立った別れ」。沢山の想い出や情景が私の心の中にも残っています。

このキャンプを通してあの雰囲気、空気感を共有し様々な原体験を提供でき、言葉ではない心のふれあいが出来たこと、豊かな心を育めたことが何よりも大きい成果でありました。そして、その原体験をもとに体感したリアルの感覚はこれから先も彼らの中に残り、現実からかい離したネットの世界から彼らが離脱できる選択肢を与えるというミッションも彼らの表情や感想から成功を感じました。

青臭いキャンプではありましたがその青さがキラキラ光る思い出となり心の中で暖かく燃え続けてくれることと信じています。

提言

青少年活動のこれから

1. 子どもたちにもっと体験を

体験でしか得られない感情や学べないことがたくさんあります。体験不足が自尊感情の低下や対人関係スキルの不足に繋がっています。コロナ禍で奪われた子どもたちの成長を取り戻すために、さまざまな体験の場を作ること、そして体験への好奇心を失いつつある子どもたちのために、保護者や指導者など大人たちが、自ら率先して挑戦し楽しんでいる背中を子どもたちに見せる必要があるのではないでしょうか。

2. 地域がゆるやかにつながる工夫を

コロナは地域のつながりを希薄にし、子どもたちを見守る目を奪っていきました。子どもたちを集めプログラムを行うという事業の形だけではなく、地域のつながりが生まれるための場を創出する必要があります。それぞれの地域の人材を生かしながら、地域の人同士がゆるやかにつながる機会を提供していくことが、子どもたちの成長を見守り、助け合う地域づくりへとつながっていくのではないでしょうか。

3. 全ての子どもたちに活動を提供するための合理的配慮を

現状の青少年活動では、参加するための費用や時間、送迎等の負担の余裕のある家庭が主の対象になっているという傾向も否定できません。障がいや家庭の経済状況、子どもたちが抱えている個別の課題などに依らず、すべての子どもたちが、活動に参加できる合理的配慮を行う必要があると考えます。

各団体が各自のミッションにたちかえり、より多くの子どもたちに活動の機会を提供できるよう、サポートの方法や事業の形態の再検討が必要です。

私たち青少年団体は今日まで、さまざまなプログラムを青少年に提供してまいりました。それらのプログラムが人を育て、人と人とを繋げてきたことは言うまでもありません。

コロナにより、青少年がさまざまな体験の機会を失い、人同士のつながりが希薄になってしまった今、私たちの役割は今まで以上に期待されているのではないでしょうか。

社会教育という視点だけではなく、コミュニティ再生のまちづくり活動、地域で暮らすさまざまな人への支援につながる地域福祉活動の視点からも、私たちはそれぞれの活動を深く見直す必要があるように思います。

令和５年３月

兵庫県青少年団体連絡協議会　調査研究委員会

ひょうご青少年憲章

平成 12 年 3 月制定

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にありますが、
先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。
私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、
自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、そしてかけがえのない地球に生きる人間として、
ひょうごの明日を担う青少年とともに、自信と夢と勇気をもって
21 世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

1　自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう
2　ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう
3　人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう
4　多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう
5　自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう
6　先人に学び、明日に夢をえがき、勇気を持って未来を拓いていこう

「ひょうご青少年憲章」の考え方

自尊（じそん）・自律（じりつ）

自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう

自ら考え、自ら判断し、自らを律していく自律性は、人間の本質に属します。そこで人は、おのおの自らを尊重し自信と誇りをもつとともに、権利や自由だけではなしに、それらと不可分に結ぶ義務や責任も果たしていくことが欠かせません。

協力（きょうりょく）・公正（こうせい）

ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう

人間は社会的な存在であり、人々の協力・協働によって暮らしを営んでいます。人と人とのふれあいを深め、社会の基本的なルールを守り、社会の構成員としての役割を担っていくことが望まれます。

思（おも）いやり

人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう

人間関係には、利害にもとづく合理的な関係と、それを越えた心のかよいあいがあり、温かい人間関係を生みだすのは後者です。そこで、人間的なぬくもりのある社会関係が形成されていくには、どうしても共感や思いやり、あるいは友愛の心が育まれていくのでなければなりません。そうでなければ、人間関係は合理性のみを追求するものとなり、人間的なぬくもりは消えていくことになるでしょう。

寛容（かんよう）・共生（きょうせい）

多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう

社会は、自分と異なる立場にあったり、様々な価値観をもった人々で成り立っています。社会の急速な変化のなかで、価値観やライフスタイルの多様化が進み、人・モノ・情報などの地球規模での交流も加速しています。このような状況のなかで、調和ある共生社会を構築するためには、人々が互いの違いを認めあい、尊重しあうことが不可欠です。

畏（い）敬（けい）

自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう

古来、私たちの先祖は、美しくも厳しい自然を畏敬の念をもって見つめ、その営みに自らの生活をあわせながらひたむきに生きてきました。しかし急速な科学技術の発達や経済の発展の中で人知と人力に対する過信が生じ、自分と自分を取り巻く世界に対する敬虔さといったものが失われ、人・社会・自然の調和は崩されてきました。私たちは、今一度、人間生活の基本にかえり、自分たちの暮らしや生き方を見直していくことが大切でしょう。

創（そう）造（ぞう）

先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

理想や夢を抱き、その実現に向けて努力することは、人間だけに備わった特性であり、人や社会のありようを決定する基礎となります。21 世紀がどのような社会となるか、また、各自の生き方がどのようなものとなるかは、私たち一人ひとりが何を理想とし、どう行動していくかにかかっています。

私たち大人が、“こころの豊かさ”を大切にしながら、自信と誇りをもって生活していくとき、子どもたちも温かい思いやりの心や明日をたくましく切り拓く力を身につけて、勇気をもって希望に満ちた未来へ大きく羽ばたいていけるようになることでしょう。

兵庫県青少年団体連絡協議会

https://seidanren.net/

兵庫県青少年団体連絡協議会　2022年度 加盟団体　23団体（順不同）	
兵庫県連合青年団	一般社団法人 兵庫県子ども会連合会
日本ボーイスカウト兵庫連盟	一般社団法人 ガールスカウト兵庫連盟
一般財団法人 野外活動協会（ＯＡＡ）	兵庫県ＢＢＳ連盟
兵庫県ユースホステル協会	一般社団法人 神戸青年会議所
公益社団法人 日本青年会議所近畿地区 兵庫ブロック協議会	兵庫県スポーツ少年団
兵庫県青年国際交流機構（ＩＹＥＯ）	兵庫県商工会青年部連合会
公益財団法人 神戸ＹＭＣＡ	公益財団法人 神戸ＹＷＣＡ
一般社団法人 神戸フットボールクラブ	兵庫県青年洋上大学同窓会
一般財団法人 兵庫県少林寺拳法連盟	兵庫県緑の少年団連盟
兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会	兵庫県世界青年友の会
一般社団法人 神戸国際支縁機構	特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫
一般社団法人 いえしま自然体験協会	

兵庫県青少年団体連絡協議会　調査研究委員会	
委員長	山崎　清治（生涯学習サポート兵庫 理事長）
委　員	速水　順一郎（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）
委　員	鈴木　武（日本ボーイスカウト兵庫連盟 相談役）
委　員	萩本　義郎（いえしま自然体験協会 副会長）
委　員	太田　はるよ（兵庫県子ども会連合会 筆頭副理事長）